



手話を通じて

顔を合わせて意思疎通を

「色々な人達と話をしたい。」

田中美都里さんが、手話を始めて25年強。視的・知的・肢体障がいの方達とは何とか意思の疎通ができますが、聴覚障がいの方達と話すには手話だと荒川区の講習会に申し込んだのがきっかけです。ここで今のご主人、泰明さん（生まれつき聞こえない）と知り合いました。

泰明さんは歯科技工士をされて30年。職場では筆談で会話をされています。

耳の聞こえない方と意思疎通をとる方法は、手話のほかに口話（こうわ）・筆談・空書き（そらがき・くうしよ）・身振り等があります。

田中さん夫婦の喧嘩は、奥さんの美都里さんは手話で、康明さんは声を出して、それぞれが相手に一番自分の意思が伝わる方法です。

「乾杯はジョッキを擦り合わせて」

乾杯する時も音が聞こえないので、ぶつかる手前で止めたり、手の甲を当てたりする人もいます。

目の見えない方は白杖を持っているので、障がいがあることが分かりますが、耳の聞こえない方は、見た目では他の人には分からないために誤解を受けること

が多あります。

また、健常者に不愉快に思うことも気がつかずにやってしまうこともあります。背後から自転車が来てベルを鳴らされても聞こえないので、道を避ける事もできません。物を落しても聞こえません。電車に乗っていてもアナウンスが聞こえないので、事故で電車が止まっても状況が分からず、どのように行動してよいかわかりません。

耳の聞こえない人は慣れた飲食店に行き、新しい店には、なかなか足を運べません。注文したものが相手に通じなく、全く違うメニューが届けられる時がよくありましたが、そんなことも今は少なくなつたとの事です。

「挨拶だけでも」

手話を学ぶ方は多いのですが会話は苦手のようで、会っても目を伏せ挨拶もせずに行ってしまう方が多く、淋しいと泰明さんは仰っていました。

「人生最後は障がいを持つ。健常者は、その為にも障がいのある人が暮らしやすい社会を作らなくては」

終生、病気や事故に遇わない保障はありません。障がいを持つ可能性は誰にでもあります。声を発して相手が反応しない理由まで考える必要があります。

中途失聴・難聴の方は喋れるけど、聞こえません。健常者意識を持ちつつ障がいを持つ為、先天性の方のように障がいを受容するのは難しい面があります。また、手話の習得も大変です。そんな方達に対し、聞こえた内容を日本語で書いて伝える要約筆記も、田中美都里さんはされています。

『私にとつて、生きることとは、コミュニケーションなのです。』

（9歳で光を失い、18歳で音を失った日本のヘレンケラーと言われる。母の考案した「指点字」で意思疎通をはかる福島智東京大学教授。）

聞けなくても、読めなくても、触れれば、言葉は生まれてくる。言葉はたくましい。“言葉と命は一つ”——

福島智さんの詩より

前に取材させて頂いた「そば処石井」のご主人の石井さんに「素晴らしい夫婦がいるんだよ」と田中さんご夫婦をご紹介いただきました。

石井さんも手話を修得して4年。田中さんご夫婦と会話しながら、終始にこやかに手話でお話をされていました。

顔を見て相手の表情を見ながら、お互い意思の疎通をする。私も、柔らかな気持ちになりました。

荒川区が、8月から手話講習会・通訳コースが荒川区社会福祉協議会で始まります。田中美都里さんは夜クラス講師を担当となります。